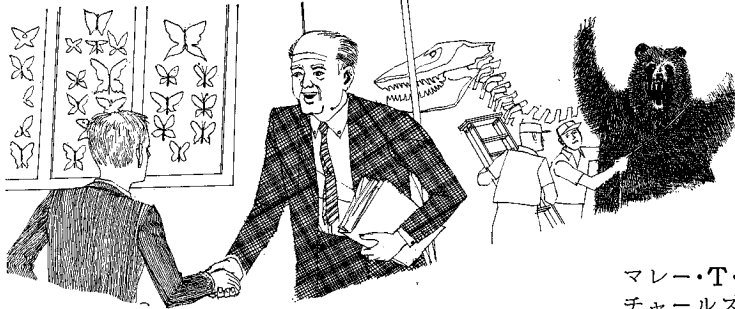


せい と みち 聖 徒 の 道



1968年10月号

こどものため



マレー・T・プリングル作
チャールズ・キルター絵

ちようちよどろぼうのひみつ

第一章

ダニー・カレンズはブリクストンの町の少年たちの中ではじぶんが一番のしあわせものだと考えていました。

ダニーにはそう考えるだけのとってもよい理由が二つあるのです。

今は夏休みだということ、仕事があるということです。それはただの仕事ではなく、やってみたいなあと思っていた仕事でした。彼は博物館の中ではたらくのです。

ダニーは大きくなったら博物学者になる決心をしていたので、できるだけたくさんのことを勉強して、じっさいに経験したいと思いました。お父さんとお母さんは、これはとてもよい考えだと思っていました。

ダニーの仕事は博物館にきそうされたちようちよを標本にするためのじゅんぴをすることでした。カーステアズさんは言いました。

「この仕事は時間と忍耐が必要です。じき

に退屈になって外へ遊びに行きたくなるかもしれない。早く仕事をかたづけたいと思ってそまつにあつかうと必ずしっばいします。「急がばまわれ」です。ダニー、それでも仕事がしたいですか」

「はい、やりたいです。ほんとうに気をつけてやります。ぼくはずっと前から博物館か動物園ではたらかたいと思っていました。それに学校で、ちようの標本をつくったことがあるのです」

「そのことなら、知っています」、カーステアズさんはほほえみました。

「君の手紙をうけとってから、学校にといあわせたら、先生はあなたが良い生徒だとおっしゃったので、君にはたらいてもらうことにしました。ふつうなら十六歳にならない人はとらないのです。もしたいくつになつたらすぐ仕事をやめて、したくなるまで家にかえるか友だちとあそんできなさい。夏中に仕事をおえればよいのですか

ら、いつするかは君のじゆうです」

「いつから始めてよいですか？」

「そうだね。明日の午後の二時はどうかね」

それからの一日はとても長く感じられましたが、やっと新しい仕事を始める時がやって来ました。ダニーはメイン街を急ぎながら店の時計を見ました。ちょうど一時三十分でした。ダニーはおくれないようにと気をもみながら、博物館のあるエバ・パークに通じるメープル通りをわたりました。

「おーい、ダニー」「まってくれよ、」

ふりむくと自転車にのっている男の子と女の子がいました。ダニーの学校の同級生のパット・パタソンと妹のパムでした。

「だめなんだよ、仕事におくれるから」とダニーはこたえました。

自てん車を引いていた少年と少女は自てん車にのってダニーを追いかけました。

「仕事だって？ もう仕事が見つかったの？ どこなの？」とパットが自てん車でそばにやってきてきました。

「博物館だよ」それからどんな仕事なのか二人に話しました。

「いいなあ、」とパットはうらやましそうに言いました。「君といっしょに行つて、はくせいにするのを見ていてもいいかい」

「ちょうちょは、はくせいになんかしないよ。標本にするんだよ」とダニーはうんざりしたように言いました。

「わかった。わかったよ」とパットはからかいながらにやにやしていました。「いっしょに行つていいだろう？ ほくたちだって手つだいくらいはできるよ。」

ダニーは頭を横にふつて言いました。

「さいしょの日だから、だれもつれて行かないほうがいいと思うけれど……カーステアズさんがよく思わないかもしれないから……。ほく、しばらく仕事をしてから、たのんでみてもいいよ。」

パム・パタソンはひとこともしゃべりませんでした。女の子としてはめずらしいことだとダニーは思いました。まだたったの十一歳でしたが、何か言わなくてはならない時、たいていものものわかったような顔をしていました。それもめずらしいことでした。ダニーはパムがすきでした。

「それならしかたがない。君一人であの古ぼけたちょうちょをつめてはくせいにすればいい、」パットはおこったようにそう言うてから、手をふつて、自てん車にのつてしまいました。

「きょうなうダニー、」とパムは始めて口を聞きました。「またあいましようね。」

ダニーは走り出して、まもなく、正面入口に通じる広い石の階段にきました。

ダニーが入つたら、ちょうどカーステアズさんにあいました。

「やあ、一ばん新しい従業員が来た、時間も正確だ。ダニー、始めからよい心がけだ。待つて下さいね。」ろうかのつきあたりにあるドアをあけてカーステアズさんは、ダニーを中へ入れました。「ダニーこれが君の事務所ですよ」と言いました。

「君の事務所」という言葉は、ダニーにとってとてもいみあり気に聞こえました。じぶんの事務所、ダニーは部屋の中を見まわしました。へやはやや小さくて、その中にある家具は一方のかべにそつている大きな仕事台とぐるぐるまわるすわりごちのよきさうな皮のいすだけでした。大きなまどからは公園が見おろせます。公園の中の小さな池には数匹のあひるが泳いでいるのが見えます。「こわれもの。取りあつかひ注意」というレッテルのついた大きなボール箱がたくさん、部屋の三つのかべに高くつみ上げられていました。

「その箱にちょうちょが入つているのですか？」と、ききました。

カーステアズさんはうなずきました。「そうだよ。博物館に寄贈されたコレクションです。アルファベットのじゅんばんでやったほうがよいと思います。アルブライトさんがあつめたものから始めましょう。マクスウェル・アルブライトさんは何年もかかって、がとちょうをさいしゅうしました。たしかに、ダニー君より時さい時から始められたと思うよ。六ヶ月前にアルブライトさんが亡くなった時、あつめた半分をここに、そして半分をクレストピューの博物館にきそうされたのです。」館長は一つの箱を仕事台のところへよせてそれをあげました。中には何百という小さな紙のふうとうがつまっています、その一つ一つにちょうが入っていました。

「アーッ！」ダニーはびつくりしました。「百万もあるだろうなあ！」

カーステアズさんはまんぞくげにわらいました。「百万とはないが、そうだね、一万から一万五千でしょうね。何しろ、君をとうぶんいそがしくさせておくくらい数はありますね。」

「そんなにたくさんあってどうするのですか？」とダニーはききました。

「それはね、一部はこの博物館ででんじし一部は学校のしぜんじしゅうやそのほかのかつ動のためにかし出します。あとはここにない見本をほかの博物館とこうかんするためにつかいます。それでは、どのようにするか教えましょう。」

館長が行ってしまってから、ダニーはまず山のようにつんであるふうとうから始めました。しゅるい、形、大きさや色のちがうこんちゅうがいろいろ入っていました。ダニーがブリクストンふきんでみかけるものはいくつかありましたが、ほとんどは今まで見たことのないものばかりでした。

ダニーはゆっくり、ちゅういぶかくふう

とうからちょうを一つとり出しました。そしてカーステアズさんから教えられたとおりに、絵かきのつかう筆をコップに入っている水にひたして、そとちょうをしめしました。見本のいくつかは長い間保管されていたのでもろくなっていました。ダニーは一つを水でしめしてから、標本にできるようにちゅういぶかく羽をひろげました。それからかわかすためにとくべつな台の上のせて、それをべつのとこにおいてつぎのにとりかかりました。とても細かい仕事で、急いではできないものでした。

ダニーは、時のたつのもわずれて、むちゅうで仕事をしていたので、かべの時計をみるともう五時十五分でした。

ダニーは台の上でき上がったちょうを見で数えると、二十七ありました。あまりたくさんではなかったのですが、むずかしい仕事だったので、とてもちゅういぶかく、かんぜんにやりました。

ダニーはほうきとゴミとりをさがして、きれいにはくつもりでした。カーステアズさんからあとかたづけはそうじのおばさんがやるときかされましたが、ダニーは自分がちらかしたところは、人にさせないで自分でかたづけるようにとひごろ教えられていました。きれいにかたづけるのに十五分かかると思いました。そうすればちょうど夕食が始まるまでに家に帰れるのでした。

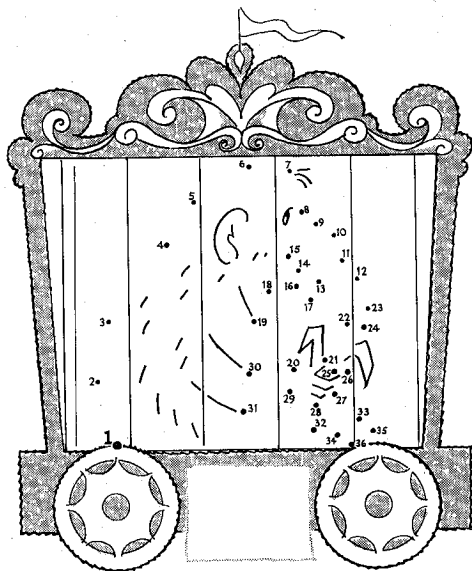
家に帰るとちゅう、ダニーはつかれたようにため息をつきました。彼はつかれていましたが、しあわせな気持ちでした。博物館ではたらくことはおもしろくてすきですし、夏中そこにいられるのですから。

しかしダニーは、まもなく、ちょうちよと、ふしぎな「モルフィー」と、とてもきみょうなものをぬすんだはん人にかかわる思いがけないじけんまきこまれるとは、ゆめにも思っていないのでした。(つづく)

動物にえさを やりましょう

ペギー・ギーゼル作

てんをばんごうじゅんにむすんでかくれているどうぶつをさがし
だしましょう。



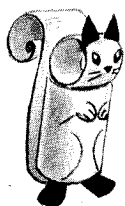
PEGGY GEEZEL

ほそながいかみきれで、 どうぶつえんをつくりましょう

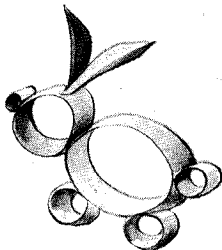
アンジェル・シューレン作

いろのついたかみ一まいを2.5センチ×30センチまたは1.5センチ×25センチのながさになんまいかきります。一まいをからだにつかい、はんぶんをあたまかあしにつかいます。のりをうすくのぼしてつけます。かたまりをつくったり、はみだしたりしないようにしましょう。わのりょうはしをのりであわせて、かわくまでちょっとのあいだゆびでおさえています。そして、あしやあたまやうでのちいさいわをのりであらだにつけると、かみのどうぶつができあがります。

りすをつくるときは、ねことおなじほうほうでつくってください。しっぽとみみさえかえれば、りすができます。



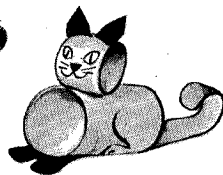
りす



うさぎ



さかな



ねこ

ふつうのおとこの子

グレース・ウールヘザー作

まことはどうぶつの本のさいごのページをめくり。あのようなふしぎなどうぶつになってみたらおもしろいだろとおもいました。

まことは本をたなの上において、だいどころへいくと、お母さんがちょうどおかしのびんにできたてのクッキーを一ぱい入れているところでした。「とても小さなクッキーだから、手につかめるだけもっていてもいいですよ」とお母さんがいいました。

しかし、まことはあまりたくさんつかめませんでした。「たこだったらいいのになあ」といいました。「そうしたら八ぼんの手でクッキーを一ぱいもつことができるのに……」

まことはお母さんにありがとうといっ、そとへあそびにいきました。

お父さんこまどりがリンゴの木の上でうたっていました。ちかくにすがありました。お母さんこまどりのあたまのてっぺんもみえました。きれいなあおいたまごの上ですわっていたのでしょうか。たまごはいくつあるのでしょうか。

「キリンのようなながいくびがあったらすの中までみられるのになあ……」とまことはいいました。

やがてお母さんのよぶこえがきこえました。「まこと、いっしやい。あたらしいくつをかいにいきましょう」とお母さんがいいました。くつやさんでまことはなんそくもはいてみました。しかしお母さんは「一そくだけで

すよ」といいました。

「むかでだったら、ぼく五十そくもはけるのに…！」とまことはいいました。

まことはその中から一そくをえらんで、お母さんといえへかえりました。

いえについてから、まことははこからあたらしいくつをとりだしました。かわはなめらかで、ピカピカひかっています。それでもお父さんのくつづみでみがこうとおもいました。まことはいっしょうけんめいこすったり、ふいたりしてみがきました。すると、あたらしいくつはもっとよくひかりました。まことはすずかりつかれてしまいました。

「ぼく、むかででなくてよかった」とまことはいいました。「五十足もみがかなくてはならないんだもの！」

「手をあらっていらっしやいね」とお母さんがいいました。

まことはせんめんじょにいったかがみをのぞきました。するとくびのところにくろいくつづみがついているのがみえました。つよくこすってやっとなれました。

「キリンでなくてよかった。ながいながいくびをあらわなくてはならないんだもの…。」とまことはいいました。

まことは手をごしごしあらいました。「たこでなくてよかった。八ぼんも手をあらうなんて…。ふつうのおとこの子のほうがずっとずっとたのしいよ」といいました。

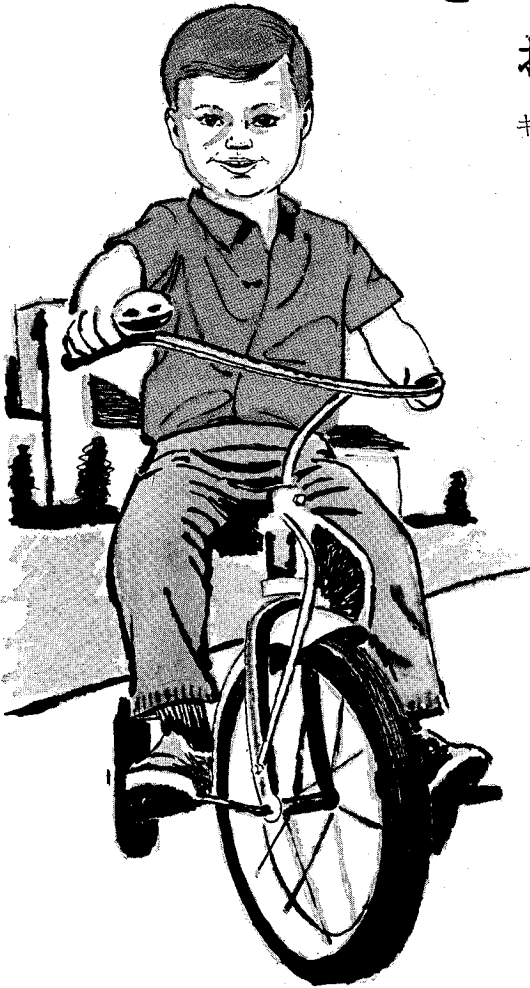
(文中の名前は日本名にしました)



ピーターの おばあさんたち

キャサリン・W・モーズリー作

ピーターにはお母さんとお父さんとパーマンという小犬と、そして三輪車とおもちゃのダンプ・カーとジルという名前の金魚がありました。でも彼にはおばあさんが一人もいなかったのです。ピーターのたいいのお友だちには二人のおばあさんがいました。ピーターはおばあさんってとてもすばらしいものだと思っていました。ときどき本をよんでくれたりおかしを作ってくれたり、プレゼントをくれたりするおばあさん。ピーターは二人のおばあさんがこんなによいものなら、三人いたらもっとすばらしいだろうなあと思いました。それは一人のおばあさんがおかしをつくって、一人のおばあさんがプレゼントをくれて、もう一人は話をしてくれるというように。ある日ピーターはお父さんとお母さんにおばあさんがほしいとたのみました。するとお母さんもお父さんもとてもかなしそうな顔をしました。そこでピーターは自分でおばあさんをさがそうと思いました。ピーターの家のすぐそばにりっぱな家があり、そこにウィリアムズさんがすんでいました。彼女はプレゼントのおばあさんとしてちょうどい



い人でした。ピーターの家から少しはなれたところに、つたでおおわれた家がありました。そこにはグリーンさんがすんでいました。彼女は売るためクッキーやケーキをつくっていました。そこでピーターは彼女はおかしをくれるおばあさんとしてびったりだと思いました。でもピーターは話をしてくれたり、本をよんでくれるおばあさんを一人も知りませんでした。彼はおかしやプレゼントよりお話のほうがずっと好きでしたので、あるはれた日にピーターは三輪車によって、三人のおばあさんをたずねました。はじめにあのりっぱな家へ行きました。ウィリアムズさんはドアをあけて、ピーターにっこりとほほえみかけました。彼女はいつもにこにこした大きな人で、おばあさんとしてはちょうどよい人でした。

「ほく、一人もおばあさんがいないのです。ほくのおばあさまになってくれませんか？」とピーターはききました。

「ピーターありがとう。もちろん、あなたのおばあさんになってあげますよ。ピーターおほいり」ピーターは一じかんもいて、ウィリアムズさんととてもたのしくあそんだり、わらったりしたので、少しもプレゼントのことなどかながえませんでした。

つぎに、ピーターは三輪車によって、つたでおおわれた小さな家へ行きました。ピーターがロックをしたら、グリーンさんはおかしを一ぱいもっていたので、かた手でドアをあけなくてはなりません。あまーい、いいにおいが家の中にただよっていました。ピーターはたのしそうにおいをかいでいました。

「グリーンおばあさま、ほくにはおばあさんが一人しかいないのです。もう一人のほくのおばあさまになってくれますか？」とピーターはききました。「まあ、ピーター、よろこんであなたのおばあさんになりまし

よう。私の小さなまごたちはとてもおおいところにいますから。さあだいどころのほうへいらっしやい…」

だいどころにはおいしいものが一ぱいありました。ケーキをつくるためのこなもおいてありました。

「このねったこなをのぼしてみない？」とグリーンさんが言いました。

ピーターがたいらにのぼしているあいだに、グリーンさんはかわいこびとのかたちを切りぬいて、それをやいてくれました。ピーターは一時間もいました。おかしのこなをたいらにのぼすのがとてもおもしろかったので、彼は、ほかのことはなにかんがえませんでした。ピーターはお昼ごはんをたべに家に帰るとちゅう三輪車をとめて、ベランダのひあたりのいいところできずこしかけていたグレゴリーおじいさんとはなしをしました。グレゴリーおじいさんの髪は白く、かおにはしわがありました。すんだ青いめはあかるくてこうふうでした。「おはようピーターくん、きょうはどうしたんだね…」とグレゴリーおじいさんがききました。

「おばあさんをさがしているのです」とピーターはこたえました。とてもいいおばあさまが二人見つかったのだけど、ほくもう一人ほしいんだ」「それはまた、ずいぶんおおぜいのおばあさんだね」グレゴリーおじいさんはクスクスわらいました。「どんなおばあさんをさがしているんだね」

「あのう…ひとりはプレゼントをくれるおばあさま、もうひとりはおかしをつくってくれるおばあさま、そしてもうひとりはほくにおはなしをしてくれるおばあさまなんだよ。」とピーターはこたえました。

「ピーターくん、おばあさまというものはあいをあたえるのがおもなことです。しかし、あの人たちがあたえる愛以上に君があ

たえなくてはなりません。そのことをよく考えて、あとで、午後にもまた私に会いにいらっしやい。」ピーターはうなずきました。それはもう知っていることでした。彼はウィリアムズおばあさんを大へん愛していたので今日の午後プレゼントをもって行くつもりでした。そしてグリーンおばさんも大すきだったので、彼はまた行って、もっといっぱいおかしができるように、ねったこなをのぼすおてつだいをしたかったのです。昼食のあとピーターはウィリアムズおばさんのために、クレヨンで一ばんりっぱなえをかきました。彼はお母さんに「野生の馬、というだいをかしてもらいました。なぜならピーターは馬がだいすきだったからです。それから、彼はその絵をもってウィリアムズおばさんのところへもどって行きました。ウィリアムズおばあさんは彼を見てあの大きなやさしい顔一ぱいにほほえみをうかべました。

「ぼくおばあさんがだいすきだから、絵をもってきました。」とピーターがいました。「私もあなたがだいすきですからおかしをやいてあげました。さあ召し上がれ」とウィリアムズおばあさんは言いました。

ピーターは食べられるだけ食べました。ウィリアムズおばあさんは、馬がだいすきですから「野生の馬」の絵は家の中で一番よい絵ですと言いました。それからピーターは、つたでおおわれた家へと出かけました。グリーンおばあさんはピーターに手をさしのべていました。「またきてくださいほんとうにありがとう。」

「おばあさんがだいすきですから、もっとおてつだいがしたいのです。」とピーターが言いました。「なんてやさしいのでしょうか。おかしをやくとき、私はいつもてつだいがひつようです。はじめる前にピーターに小さなプレゼントをあげましよう。」と

グリーンおばさんがいました。

そしてピーターを彼女のへやにあるはこのところへつれて行きました。「このおもちゃは、私のむすこがちょうどピーターのとしごろにつかったものです。どれでもすきなものをえらんでおとりなさい。」

はこはおもちゃで一ぱいのようにでした。ピーターはきいろのはしごが一本なくなっているふるいあかいしょうぼうのトラックがいちばんきにいました。それから彼はグリーンおばさんといっしょにこなをのぼしておかしのかたちを切りぬきました。

ピーターがとおりがかったら、まだグレゴリーおじさんがベランダのいすにこしかけていました。彼はたちよって、グレゴリーおじさんにあかいしょうぼうのトラックをみせて、どんなにたくさんのおかしをたべたかを話しました。

「ピーターはきつと二人のすばらしいおばあさんをもっているんだね。」とグレゴリーおじさんがいました。

「そう。ぼく二人ともだいすきなんだ。けれども、みんなこんがらがっているんだ。ぼく、プレゼントもらったりおかしをつくらせてくれたりすることなんてそんなにかまわないんだよ。だけど、そうしてくれたんだ。ぼくにプレゼントをくれると思っていたおばあさまが、おかしをつくらせてくれたり、おかしのおばあさまはプレゼントをくれたんだ。」とピーターはにやにやしなから言いました。

グレゴリーおじさんはおなかがいたくなるほどわらいました。そして彼は、「そのとおりでよ。もう一人こんがらかったおばあさんがほしかつたら、私がそれになってお話をしてあげましよう。男の子に話さなくてはならないお話がたくさんあるのだよ。さあ、私のそばにこしかけなさい。むかし、むかし、あるところにね……。」